

クラレグループのDNAと 培ってきた強み

事業活動を通じた社会的課題の解決・経済発展への貢献

1926年、クラレは化学繊維レーヨンの事業化を目的に岡山県倉敷市で設立されました。

創業者・大原孫三郎と第二代社長・大原總一郎は、技術革新による事業の発展に努める一方、環境問題への対応といった企業の社会的責任を重視し、事業活動を通じた社会的課題の解決に注力してきました。

戦後間もない1950年、大原總一郎は原料樹脂のポパールから合成繊維ビニロンを一貫して製造する技術を確立しました。このビニロンの事業化は、一企業の利益のためだけではなく日本の繊維産業を復興するものであり、「高品質で安定した収益をもたらす製品づくりには、輸入に頼らず、原料から一貫して自社生産しなければならない」という経営者の不退転の決意のもと成し遂げられました。

CSR（企業の社会的責任）という言葉がなかった時代に、経営者たちが持っていた先駆的な精神は、クラレグループのDNAとして今日においても受け継がれています。



初代社長
大原孫三郎

社会から得た財はすべて社会に返す

企業の社会的責任を重視し、大原社会問題研究所、労働環境の改善・改革に取り組む倉敷労働科学研究所（現・大原記念労働科学研究所）、倉紡中央病院（現・倉敷中央病院）などを設立。地域の医療・福祉や教育・文化、人々の生活水準の向上に貢献しました。



第二代社長
大原總一郎

企業が得るべき利潤は技術革新による利潤、社会的、国民経済的貢献に対する対価としての利潤に限る

公害という言葉がまだ珍しかった時代にいち早く企業の排出責任に言及したほか、1950年には独自技術による国産初の合成繊維ビニロンを世界に先駆けて事業化しました。その後も、天然皮革に代わる世界初の人工皮革〈クラリーノ〉を開発・事業化するなど、事業活動を通じた社会的課題の解決と経済発展に貢献しました。

1926

レーヨンの事業化を
目指して創立

~1980

ビニロンと新事業の創出

1950年に国産初の合成繊維ビニロンを世界で初めて事業化したのを皮切りに、ポパール樹脂、人工皮革〈クラリーノ〉、ポリエステル、EVOH樹脂〈エパール〉やイソプレンなど新規事業を相次いで立ち上げました。

~1990

合成繊維の高機能化

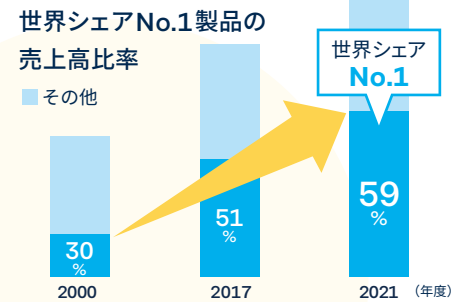
事業の多角化を推進し、合成繊維では衣料用だけでなく、ビニロンや〈ベクトラン〉などの機能性を生かし産業資材を中心に事業領域を拡大しました。

クラレグループは、その歴史の中でたゆまぬ技術開発と市場開拓に努め、数々の先駆的な事業を立ち上げました。「世のため人のため、他人(ひと)のやれないことをやる」という使命に基づいて、自らの創意と努力により技術的課題を克服し、生まれた独創性の高い製品は社会に価値を提供し、世界中で広く活用されています。

独創的な技術が生み出す世界シェアNo.1製品^{※1}

クラレは独自の技術力で、世の中になかった製品を生み出してきました。合成繊維ビニロンの世界初の事業化に始まり、ビニロンの原料樹脂であるポパール、液晶ディスプレイに欠かせない光学用ポパールフィルム、高いガスバリア性を持つEVOH樹脂〈エパール〉、世界唯一の合成法イソブレンから生まれるケミカル製品群などを事業化。また天然皮革の構造を再現した人工皮革〈クラリーノ〉、面ファスナー〈マジックテープ〉など、特長ある多くの製品を展開しています。独創的な技術から生まれた世界シェアNo.1製品の売上高は、グループ全体の59%に達しています。

※1 当社調べ



世界シェアNo.1の製品



ポパール樹脂
(中国を除く)



光学用ポパールフィルム



水溶性ポパールフィルム



〈エパール〉
EVOH樹脂



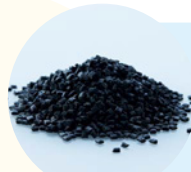
ビニロン/
〈クラロンK-II〉
PVOH繊維



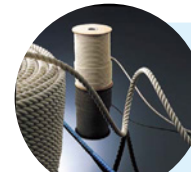
イソブレン
ケミカル



〈ジェネスタ〉
耐熱性ポリアミド樹脂



活性炭



〈ベクトラン〉
高強力ポリアリレート
繊維



化学品・樹脂事業の海外展開

化学品・樹脂事業では高い市場シェアを背景に海外で販売が増加、現地での生産体制を構築しました。

M&Aを通じたビニルアセテート関連事業の拡大

2001年以降、ビニルアセテート関連事業において海外M&Aを通じてダウンストリーム展開および事業規模の拡大を推進し、事業ポートフォリオを強化しました。

「社会・環境価値」「経済的価値」を重視した事業ポートフォリオへ

「社会・環境価値」「経済的価値」の2軸で評価を行い、資源配分を重点的に行う事業・製品を特定し、事業ポートフォリオの高度化を図ります。

創立100周年